



震災を乗り越えて

徒歩での避難では間に合わないとの判断から、校舎屋上に避難させ児童の安全が確保された

山元町立中浜小学校のケース

1 はじめに

3月11日の東日本大震災により、宮城県南部東部の海岸線にある本校は津波の直撃を受けた。着く直後の情報も判断し、二階建て校舎の屋上に避難させた。児童、教職員、保護者、町職員の90名は幸運にも全員が生還したが、学区内の児童59名は全員無事であったが、学

4月からの新学期は、町内に隣接する坂元小学校へ併設し授業を再開した。校舎周辺は未だに危険地帯であり、将来的に今の場所での学校再開は難しい。

2 中浜小学校の被災状況

校舎は東側から高さ約10mの津波が突き抜けて2階の天井あたりまで海水が達した。校舎西側の体育館は、引き波により躯体のみを残し大破した。校舎が被災を免れた。



ほぼすべての施設、備品は使用不能。海岸線は地盤沈下し、以前の河口は入江となり、校舎まで150mほどに近づいている。

3 3月11日 あの日あの時

14時46分は3年生以上が6校時の授業中。2年生以下は授業が終わり上級生と一緒に下校するため、校庭で遊んで待っていた。この日の職員の勤務状況は、出張や年休で手薄だった。

かつて経験したことのない大きな揺れ。宮城県沖地震が「いよるかに来たか」と感じました。職員室は揺れが激しく、職員室の窓ガラスが割れて、職員室の机が倒れてきました。私は、揺れの中を職員室の窓から校内放送機から校内放送の音を確認し、テレビの情報を確認し、二次避難所の坂元中学校へは平坦地を走り、低学年の子どもたちの足で20分以上かかると判断し、坂元中学校への避難は断念した。この時、線は使用不能。外で、消防車が何台も来たが、よく聞き取れなかった。



校庭には低学年の子どもたちが2学年担任と丸く座っているのが見えた。私は「津波だ。上にあがれ。」と指示。担任はすぐに察して全員を校舎内に入れ二階に上がって行った。二階の図書室前で点呼をしている際、テレビは5m～10mの波であるとの報じている。ここから津波が来るかわからない状況の中で引き渡すより保護者にも屋上に上がることを勧めた。しかし、それでも引き渡しを求める保護者がいた。学校としては、屋上にいることが安全だと考えていることを再度伝えた上で、家に帰らず、まっすぐに坂元中学校へ行くことを約束してもらい、引き渡しを行った。この人たちは、途中で車を乗り捨てて高台に登り、危

津波は大きなものは第4波まで襲ってきた。第一波は突然海面が盛り上がり、圧倒的な水量であふれ出し、周りの民家を土台から押し流した。第二波は一波の上に乗る間に校舎の二階まで達し、その時では第三波と第四波が恐ろしい高さまで迫ってきた。「飛ばさないと、覚悟するほどだった。しかし、第一波と二波が引き波に変わり沖で三波とぶつかり砕けた。それでも三波は二階の天井まで達し、校舎東の壁にぶきを上げるほどだった。第四波は、三

波程の高さには達しなかった。頑丈な校舎は地震と津波に耐えた。しかし津波が去った後、校舎は孤立。屋上の屋根裏倉庫で一晩を明かした。中にあるものすべてを使って一晩を過ごす工夫をした。

第4波を無事過ごし、最大の危険が去ったとき、三年生の男子が「おなかすいた」の一言。しかし、校舎はまだ海の中、完全に孤立しているということを知らせなければならなかった。このことを誰が伝えるかということ、私しかいないのだと思った。

私は、地区民、保護者も含めて全員に対して現状と、今後どうするかをはっきりと伝えることにした。屋上にいた全員がしっかりと聞いてくれた。「今夜はここに泊ります。食べ物はありません。水もありません。とても寒くなります。でも、朝までの頑張りましょう。暖かい朝日は必ず昇るから。」この後全員で寝るための準備を素早く行った。仮設トイレを作った。午後6時頃の暗くなる頃は皆横になっていた。空には見たことのないような星が瞬いていた。放射冷却で気温がぐんぐん下がった。

児童全員がかぶっていた防災頭巾は、寒さを防

ぐ防寒頭巾であり、枕であり、安心感を生む優れものであることが分かった。

みんなの無事を伝えようと携帯電話を持っている人たちが連絡を試みた。電話はつながらないもののメールは瞬間的にサーバーにつながることがあるようで、つながった瞬間に受信できた。午後6時頃になんとか役場と坂元中へ連絡が通じたようだった。

夜中はラジオとワンセグで情報をとり続けることができた。懐中電灯は、2本あったので一本はつけっぱなしにし、もう一本は、トイレに行く時だけ使うことにした。途中私が2階に探索に行っていた時、単一乾電池2本を発見したので、一本の懐中電灯はつけっぱなしにすることができた。教頭は2階からブルーシートを探してきた。

夜中に1階まで降りて体育館を探索してくれた勇気のある人たちが体育館の体育倉庫から非常用毛布を発見した。突然厳しい環境が和らいだ。毛布はアルミの真空パックに入っていたので全く濡れていかなかった。アルミパックは防寒着となった。続く余震と寒さに耐えながら、全員が無事に朝を迎えた。翌朝6時、自衛隊の大型ヘリコプターが上空を通過した際に我々を発見。全員無事救助された。



4 校舎が守ってくれた

新校舎は平成元年に建てられた。以前の校舎は高潮のたびに校庭に浸水していたため、校地全体を1.5m程度かさ上げした。校舎の土台も堅固で足元からすくわれることはなかった。休日避難用の外階段や円柱の柱、屋根裏倉庫などハザードマップに対応した津波対策が施されていた。屋上施設は、海の方角だけが見える構造で、児童は、過酷な光景を見ることがなかった。校舎内部は、津波で破壊されたが、躯体は実にしっかりしており内装を施せば、まだ使えそうだ。我々は、校舎にそして、この校舎建築に携わった人々に感謝した。

5 屋上避難の背景

- (1) 河口に近く、津波の浸水域であることの危機感を、校長をはじめすべての職員が常にもっていたこと。
- (2) 避難マニュアルを前日に確認し合っていたこと。
- (3) 校舎の構造と屋上施設の存在を日常点検により実際に確認していたこと。

- (4) 津波想定避難訓練を毎年実施し、検討課題を引き継いできたこと。
- (5) 地区民から建設当時の情報を日ごろの雑談から得ていたこと。(校舎に対する信頼)

6 子どもたちへの配慮

- (1) 津波直撃の瞬間を見せなかったこと。
- (2) 防寒着、防災頭巾を児童全員に身に着けさせたこと。
- (3) 避難所までの状況を先遣隊を組織して確認したこと(避難所までの道は避難可能かどうか。子どもに見せたくない光景を見せないで済むかどうかの確認)

7 幸運が重なった

- (1) 3月9日の三陸沖地震で津波警報が出た。
- (2) 10日に津波対応の打ち合わせを行った。
- (3) 第3波が引き波と砕けて屋上を超えなかった。
- (4) 校舎が頑丈で地震と津波に耐えた。
- (5) 体育館に避難しなかった。
- (6) 下級生が下校せず、担任が遊んでくれていた。
- (7) 非常用毛布、ブルーシート、乾電池を発見した。
- (8) 懐中電灯が2本あった。
- (9) 松島に向かうヘリコプターが気づいてくれた。校庭に着陸できた。
- (10) ヘリで救助されたので遺体など見せずに済んだ。

8 今回の対応における反省点

- (1) 屋上避難には限界があること。
- (2) 全員無事の連絡ができず、心配をかけた。
- (3) 屋上施設に、備蓄品を配置していなかった。
- (4) サーバーを流し、保有する貴重なデータを一瞬のうちに失くした。
- (5) 校長判断で屋上に上がったが、命と引き換えとはいえ、保護者を含め屋上へ上がった者の所有する車をすべて流し失した。

9 津波における避難行動について今思うこと

- (1) 津波の場合は、地震直後の初動の時間帯が命を守る貴重な時間帯である。
- (2) この時間帯に保護者への引き渡しを重ねることは危険を増加させる。引き渡しは、安全な場所に移動した後で行うことを保護者に事前周知することが重要。
- (3) 学校は、地域住民の緊急の避難先でもある。時には学校の避難行動の方針を明確に伝え協力を求めることが重要となる。
- (4) 避難行動に100点満点はありません。助かるためのギリギリの選択を瞬時に毅然と行うことが求められている。
- (5) 生き残るためのより良い判断は、危機意識の高さと直接見聞きした何気ないことの積み重ねが背景となる。

10 再開に向けた取り組みは当日から始まっていた

- (1) 子どもたちを全員守ること
言うまでもないが、子どもたちのいない学

校はありえない。子どもたちの命を全力で守ることが学校再開の第一歩であり、地域の未来につながる。

(2) 再開に向けた基本的な文書を守ること
(非常持ち出し品)

当日、金庫より「指導要録、健康診断書、教職員の履歴書、職印」を持ち出し屋上へ上げた。再開時の最初の手続きとして、児童の転出事務、中学校への進学事務、職員の人事異動に伴う異動事務が待っていた。非常時に持ち出すことができたことで事務処理の混乱を最小限に抑えることができた。

(3) 避難所にて

① 中浜小の教職員は避難者であり運営者であった。避難所本部の町職員や坂元中学校の職員とともに避難所運営側としての仕事を担う一方で、職員も車を流され帰宅できない避難者としての避難生活を送った。この立場を身近で理解でき運営の円滑化に役立った。

② 避難所生活の中で、子どもたちとともに生活し活動を組織し、生活のリズムを確立した。

子どもたちの笑顔やあいさつ、歓声が住民の励みになった。具体的な活動は次のとおり

ア 起床後の清掃を子どもたちから始めることで住民の自主的な清掃活動につながった。

イ だれにでも元気よく挨拶をさせること。

ウ 朝の会を定時に開催し、健康観察とストレッチ体操、必要な連絡を行った。

エ 午前中は、小学生向けの学習プログラムを教職員の当番制で実施した。

※ ウ・エは月～金までのプログラムとして実施し、土日は敢えて行わないことで教職員の負担軽減も図りつつ、子どもたちには、週間リズムを崩さないよう配慮した。

オ 避難所においては、親との生活が主であること、を基本としながら、すぐそばに職員がいて、いつでも相談にのることが重要であった。一時帰宅が可能になってからは、他校の職員の車に便乗させてもらい、あるいは自転車で通勤するなどしてローテーションを組んで最小3名体制で土日関係なく避難所に常駐した。



(4) すべてを失くした ほぼゼロから始める

<中浜小学校>

屋上に上げた非常持ち出し品(指導要録・健康診断票・職印履歴書・職印)以外は、海水に浸ったり、流失した。学校運営のための諸計画および備品はほぼすべて流失または使用不能。

特にダメージが大きかったのは、最近のIT化によるデータの消失である。校内LANを組んでいた校務用パソコンのデータは、職員室のサーバーに一括保存されていた。次年度の教育計画もこの時点で完成していたが、サーバーに保存され出力できなかった。バックアップ用ハードディスクは金庫の中で海水に浸り復旧できなかった。

当面、何から始めたらいいいのか検討する手段として、mind mapを利用した。必要だと思われるものを書きこみ、さらに詳しく手立てなどを枝分かれさせて広げていく方法で再開の方向性を視覚化することができた。

坂元小との併設で授業再開するまでを区切りとしてmind mapを活用して具体的な準備作業を行った。

支援の募集をいち早くツイッターを利用してネット上で呼び掛け新年度の準備を開始した。支援物品のミスマッチや過剰な供給により好意を無にする状況を避けるため、充足した物に対しては、いち早く「満員御礼」の発信を試みた。

<児童・保護者>

3軒の保護者の家をのぞいて多くの家庭は家屋が流失し、ほぼすべての家財、学用品等を失った。

支援品を募り学用品等ほぼすべてを準備配

布して新学期に間に合わせた。



(5) 坂元小との併設

平成23年度 山元町の教育基本方針に再開の決意を新たにした。

坂元小とは、歴史的に本校と分校の関係であって祖父母の時代には一緒に学習した経験を持つ人たちもおり、併設を快く受け入れてもらうことができた。

教室数や心のケア、学力の保障の観点から両校の児童が合同で授業を受け、両校の担任が連携して指導を行うことで授業を開始した。合同授業は制度上の壁があったが、指導を受けながら実施にこぎつけた。

① 人的配慮

ア 復興支援加配、転出職員への兼務発令や緊急学校支援最大弱性を用いることによる組織的な支援を最小限に食い止めることと、例年ない仕事の増大に対応した。

イ 学級担任は可能な限り前年度の担任の持ちあがり原則とし、児童・保護者の不安を和らげた。

② 合同授業（一つの学級に両校のそれぞれ担任を配置しTT等によるきめ細かな指導を実施）

ア 成果
両校の担任の連携で当初の混乱の中でも学習を進めることができた。配慮を要する子どもへの個別の対応を授業中でも素早く行うことができた。教師自ら被災しながらも指導に当たることが、教師同士の支え合いに助けられた。

イ 課題
両校間での立場の違い、これまでの教育環境や教育計画の違い、職員の意識や取り組みに対する微妙なずれは至る所に存在する。調整する作業が常に必要であり、合同運営委員会での意思決定の共有化をはかり教務主任間、教頭間で調整を行っている。

被災状況の大きく異なる地区の児童が一つの教室で生活することによる配慮を継続して行う必要がある。特に今後拡大していくであろう経済的な格差に配慮する制度の積極的な利用を働き掛けている。児童数の減少が教員定数の問題となつて学級編制等、24年度以降の難しい対応を迫られる。再開の道はようやくスタートラインについたばかりであり、来年度以降も人的な配慮は必要である。

③ 心のケアと個別（戸別）のケア

ア 心のケア
各学級に子どもたちをよく知る担任を配置できたことで、安心感を与えた。退職後に緊急学校養護教諭として中浜小に残って勤務した上で泣くことができた。子どもたちだけでなく、保護者や祖父母も相談に訪れていた。

他県からも緊急学校スクールカウンセラーが配置され、継続的な支援をしていただいた。支援であるため長期にわたっての相談の継続はできなかつたが、それぞれ工夫をしていただきながら、児童、職員ともにカウンセリングを受けることができた。これから、特定の子どもに対する継続的な長期にわたってのカウンセリングが必要となる段階に入っている。

イ 個別（戸別）のケアと地域コミュニティの再生

子どもたちは、家庭環境の影響を引かず登校してくる。登校してくる子どもたちの表情を校門で迎え見てきた。休み明けの子どもの表情に疲れ様を見ることがあった。保護者、祖父母を元

にすることがやがて、子どもの心の安定に通じる。児童個々の生活環境を把握し、相談に応じたり個別に配慮することが必要である。

子どものバックグラウンドを改善することに力を注ぐ必要がある。そのために、地域の活性化を学校が意図的に仕組むことも時には必要である。

中浜小学校では、地域の伝統芸能の「中浜子ども神楽」の復活が地域の活性化に役立つと判断し取り組んできた。津波に流された衣装類の制作を仮設住宅のお年寄りたちに依頼したところ、喜んで懸命に衣装作りに励んでいただいた。また、練習の様子を参観していただいた。子どもたちは練習に真剣さが増した。お年寄りたちは、自分たちが作った衣装をまっとうして孫たちが踊る運動会での神楽の披露を楽しみにしていた。

学校が地域のコミュニティ再生にも積極的に関わることで子どもたちに健全な成長に関わってくることが分かった。

11 おわりに

津波の避難は初動が大切である。避難行動は極力シンプルにすべきだ。

万一の時、学校はどう行動し、どこで保護者周りに引き渡すのかをマニュアルとして保護者に周知して確保されることは重要である。引き渡し作業が安全が確保されることではない。学校が一方的に引き渡しを拒むことはできない。その時は、保護者にも避難の協力者となってもらう。

当日の屋上避難という判断の背景は、日ごろの生活の積み重ねであった。常に危機意識・減災意識を持って生活することによって、最善ではないがより良い判断ができる。

校長の判断は、命を守る賭けである。常にこれだけかつかつたのか反省させられる。しかし、毅然と貫くことが今回の場合必要であった。

学校再建に至るプロセスは、大人の都合で子どもを翻弄しないことだ。制度上の制約を乗り越える復興への支援と配慮を長い目をお願いしたい。今年度だけで解決するものではない。

子どもたちの笑顔は学校の活動の中だけではない。地域や家庭の生活から不安や悩みが子どもにも大きく影響する。学校は内向きにならず、常に周囲を見てお年寄りや地域を元気づける、取組も積極的に行わなければならない時がある。

合同授業は、ようやく長所を生かせるようになってきた。

残念ながら、これから先の教育活動には地域により対応にむけた温度差が拡大するだろう。しかし、被災校も被災を免れた学校も、例年通りは通用しない。常に工夫と創造の毎日である。内陸部、海岸部を問わず補い合って真の意味での復興に取り組まなくてはならないと思う。

